

Ⅱ 遺 構

今回の調査地一帯はもと水田で、調査前には上に盛土があった。調査区の土層は水田耕土、床土の下に灰褐色土、暗褐色土などの遺物包含層ないし整地層とみられる土層が続き、砂質土または粘質土の地山に至る。中・近世の水田耕作に係る細溝を除き、遺構の大部分は地山面で検出した。検出した遺構は年代順にみると、平城京以前、平城京（西隆寺造営以前）、西隆寺期、西隆寺廃絶後の4時期に分かれる。

遺構の記述に際しては、各調査区ごとに土層の状況、遺構の解説の順でおこなう。

1. 北面回廊・金堂調査区（第299次）

北面回廊中央部付近から金堂北端にかけて調査した。調査面積は320㎡で、南端70㎡は西隆寺第3次調査区と重複させた（fig. 3・4）。

基本層序

調査区の基本層序は、上から盛土、水田耕土、床土、灰褐色砂質土（遺物包含層）と続き、現地表下約0.8m（標高71.7～71.8m前後）の黄褐色砂質土（整地土と推定）上面で西隆寺関係の遺構を検出した。その下の灰色または黄褐色砂質土上面で、西隆寺造営以前の平城京および平城京造営以前の遺構を検出した。この調査区での遺跡のベースは、基本的に砂質土あるいは砂層である。

検出遺構

平城京以前の遺構

調査区北端に検出された掘立柱建物、溝、土坑などがある。

SB 680 国土方眼北に対して西に約25度振れる大型掘立柱建物の南西部分。この建物の平面復原は確定しないが、西側に底の付く平面と仮定して記述する。身舎の柱位置3箇所は布掘状の掘形（幅1m、長さ5.5m。北寄り東に1mほど張り出す）内にある。底掘形は4箇所あり、平面は1.0×1.5m前後で東西に長い。妻側掘形は2.1×1.2mと南北に長い。掘形の深さは身舎が0.2～0.4m、庇では0.2～0.5m、妻柱掘形が0.9mで最も深い。妻柱掘形には角柱の柱根（断面が23×51cmの長方形、残存長さ42cm、fig. 5）を残し、他は抜き取られている。柱間寸法は梁間が約2.3m、桁行と庇の出はいずれも約2.7m。柱根の樹種はヒノキで、最外年輪が西暦265年という測定値を得た。この資料は樹皮、辺材（シラタ）を残していない。

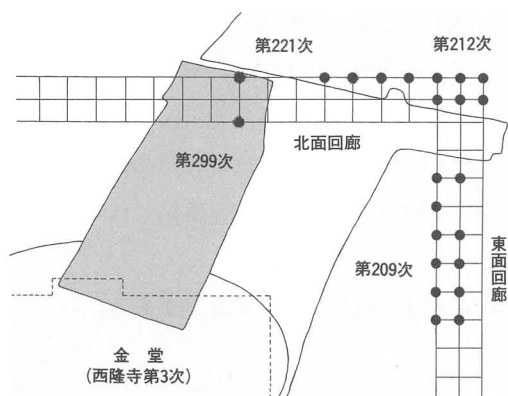


fig.3 第299次調査区位置図 1:800

SD 681・SX 686他 SD 681はSB 680の西に約2.2m離れ、南に延びる細溝。幅は0.2～0.25m前後で深さ0.1m前後、溝内部は黄色粘土で共通し、SB 680と同時期と推定される。SX 686他は小穴群で、埋土は黄褐色粘土で、SB 680の足場穴が含まれよう。

SK 684 北西隅部で検出した一辺1.2mほどの土坑の一部。埋土は炭化物混じりの暗灰色砂質土で、6世紀後半の須恵器が出土した。

SK 685 SB 680庇南端の掘形に重複する土坑。一辺約3m、深さは0.7mまで確認。出土遺物は無い。

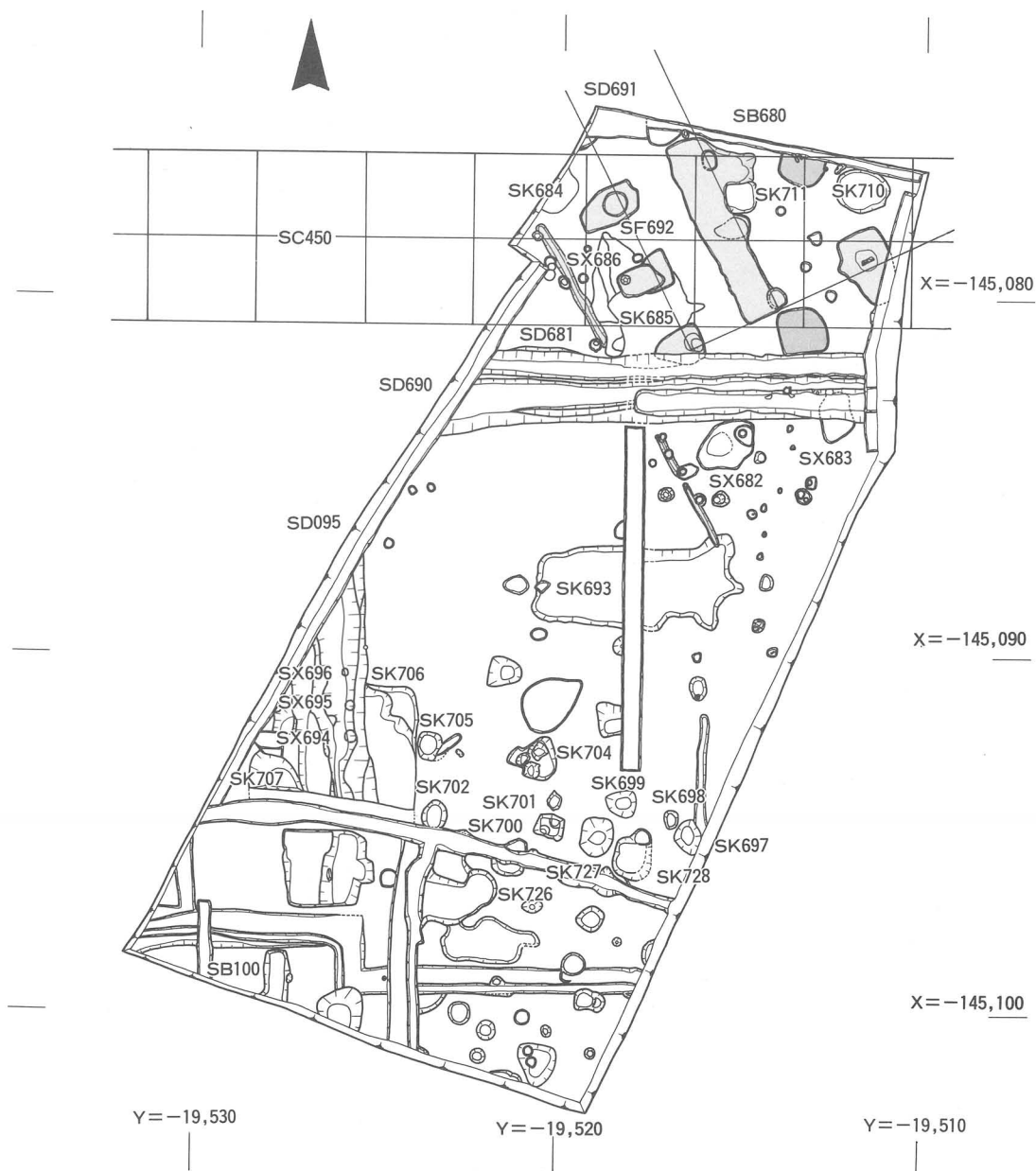


fig.4 北面回廊・金堂調査区(第299次)遺構平面図 1:200

平城京（西隆寺造営以前）の遺構

いずれも西隆寺造営時の整地層とみられる黄色砂質土の下から検出した。区画の北および西を限る溝、区画内の土坑などがある。

SD095 西二坊坊間西小路東側溝。調査区南西部の南北溝で、西隆寺第3次調査で検出したSD095の北延長部にあたる。溝の規模は幅1.9m、検出面からの深さは検出0.4mである。溝の勾配は南下がり。溝内の堆積層は下層が暗灰色砂質土または茶褐色砂質土、上層が灰褐色砂質土である。灰褐色砂質土上面には小穴3箇所（SX694～696）が掘られており、そのうちSX695からは銅鉤転用環珞が出土した。灰褐色砂質土層からは銀製帯先金具が出土した。SD095からは土器、埴輪片などが出土した。出土土器は平城Ⅲまでのものが多い。

SD 690 一条条間北小路南側溝。調査区北寄りの東西溝で、幅1.96m、深さ0.5mである。溝内埋土は、大きく上層（灰褐砂質土）、下層（灰色砂質土）に分かれる。溝の東半部には灰色砂質土の下に、暗灰色質土がある（fig. 6）。溝底の一部に杭列跡とみられる小穴群がある。暗灰色砂質土上面は酸化鉄やマンガンが沈着し、暗赤褐色を帯びる。出土土器は上、下層とも、ほぼ8世紀前半におさまり、顕著な時期差は見出しがたい。

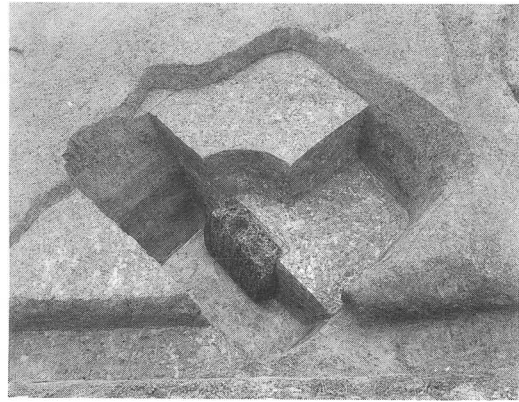


fig.5 SB680の柱根残る柱穴(東から)

SD 691 一条条間北小路北側溝。調査区北西隅で検出した。後世の土坑と重複しており、わずかに南端（幅0.7m、深さ0.2m、暗赤褐色砂質土が堆積）を残すのみ。奈良時代前半の土器が少量出土した。

SF 692 一条条間北小路。SD 690とSD 691とにはさまれた東西方向の空間。路面幅は約6.0m。

SK 693 土坑。東西約5.8m、南北約2.1m、深さ約0.25m、埋土は暗褐色砂質土である。土器は土師器甕・杯、須恵器杯・甕などの奈良時代前半中頃のものが少量出土した。区画内の北東隅の塵芥廃棄用の土坑であろう。

西隆寺の遺構

SB 100 金堂。西隆寺第3次調査で検出した金堂の基壇北端部分にあたる。削平により金堂の基壇土は残存しておらず、掘込地業も見られない。本調査区では基壇外装の抜取溝を東西に約15m分を再検出した。そのうち西寄り約6mは階段部分で、北に約1.5m張り出す。

SC 450 北面回廊。後世の削平のため回廊基壇土、基壇外装、雨落溝などは失われているが、調査区北端で、礎石の据付け掘形を南北2箇所を検出した。第212次調査で判明している回廊北東入隅から西へ数えて7番目の柱位置にあたる。掘形は、いずれも一辺約1.4mのほぼ方形で、底部をわずかに残す（深さ0.1～0.2m）。掘形埋土は暗褐色砂質土である。掘形中心間の間隔は4.8m、複廊の南および北側柱筋にあたる。基壇の掘込みは認められない。

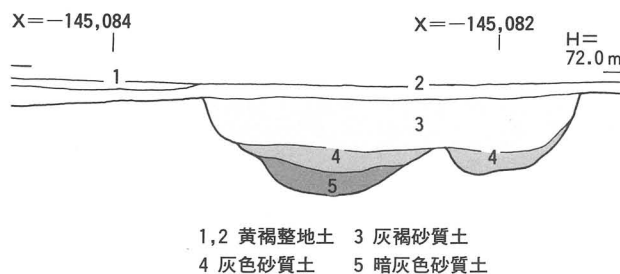


fig.6 SD690断面図(Y=-19,518) 1:40

西隆寺廃絶後の遺構

SK 697他 土坑群。西隆寺廃絶後瓦片や、凝灰岩片を廃棄した土坑。金堂北側の11箇所（SK 697～702・704・705・726～728）には特に瓦が多く廃棄される。土坑の大きさは一辺0.5～1m、深さ0.4～0.6mほどのものが多い。土坑内の瓦は、細かく破砕されているのが特徴である。

2. 金堂・中門北調査区（第306次）

本調査は西隆寺寺域のうち、金堂基壇の一部および金堂と中門の中間地を発掘した。調査区は排水管が横切っているため南区、中区、北区と3つに分かれており、調査面積は全体で650㎡、北区・中区で西隆寺第3次調査と約85㎡重複する。

基本層序

現地表面から順に近現代の盛土、黒灰色粘土（旧耕土）、灰白色砂質土（床土）、黄灰・褐色砂質土（遺物包含層）となっており、その下の褐灰色砂質土（整地土）上面および灰青茶色細砂・灰褐色粗砂（地山）上面で平城京や西隆寺期の遺構を検出した。遺構面の標高は71.5～71.65mで、北東から南西にゆるやかに下る。

遺構は、おもに平城京以前の斜行溝10条、平城京期の西二坊坊間西小路と東西両側溝、東西溝5条、井戸1基、西隆寺期の灯籠据付穴と東西瓦敷、西隆寺廃絶後の瓦土坑などを検出した（fig. 8）。金堂基壇は削平されて全く残っていなかった。他に建物や塀など遺構としてはまとまらない小穴・小土坑も多数検出した。

検出遺構

平城京以前の遺構

SD741～SD749・SD754 国土方眼の約45度方向にはしる斜行溝群。中区・南区の地山（灰青茶色細砂・灰褐色粗砂）上面で、北東から南西および北西から南東へ下る溝をそれぞれ5条ずつ検出した。前者と後者はほぼ直交する。幅は0.25～0.35m、深さ0.05～0.15mで、SD741のみ幅が約1mとなる。また溝心距離は2.0～2.5mである。SF105上でも検出したが、SD095やSD110には切られることから、奈良時代以前の遺構と考えられる。埋土は黒茶色粘砂で遺物は全く含まないため、水田耕作にともなう溝もしくは水田の区画を示す畦と推測する。ちなみにSD743, SD745などは、東方で以前検出された古墳時代の斜行大溝SD350とほぼ平行になる。SD350は水田にかかわる灌漑用水路とみられており、今回検出した斜行溝群もSD350と一連のものと考えられる。

平城京（西隆寺造営以前）の遺構

SD095A・B 西二坊坊間西小路東側溝（fig. 7）。西隆寺第3次調査の重複部分を含み、南北約28m分を検出した。第3次調査同様、2時期に分かれたが、SD095A・Bとも素掘り溝で南に流れる。下層のSD095Aは幅が約1.6m、深さが0.1～0.2mで、埋土は茶色系粘土と灰白色砂質土がシルト状に混ざる。上層のSD095Bは幅約2.3m、深さ0.1～0.35m、埋土は黄灰～暗灰色の砂質土で平城Ⅲ～Ⅳの土器などを含み、広めに改作されていた。

SD110A・B 西二坊坊間西小路西側溝。SD110A・BもSD095同様、南に下る素掘り溝で、南北約27m分を検出した。下層のSD110Aは幅1.6～2.0m、深さ0.15～0.25m、埋土は暗青灰色粘質土と灰色砂がシルト状に混ざる。溝底上面で土器片が多く出土した。上層のSD110Bは幅3～4m、

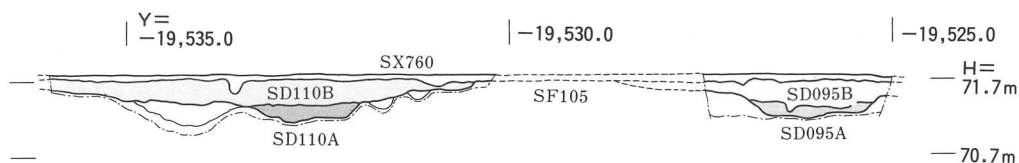


fig.7 SD095・SD110・SF105・SX760断面図(X=-145,127.0) 1:100

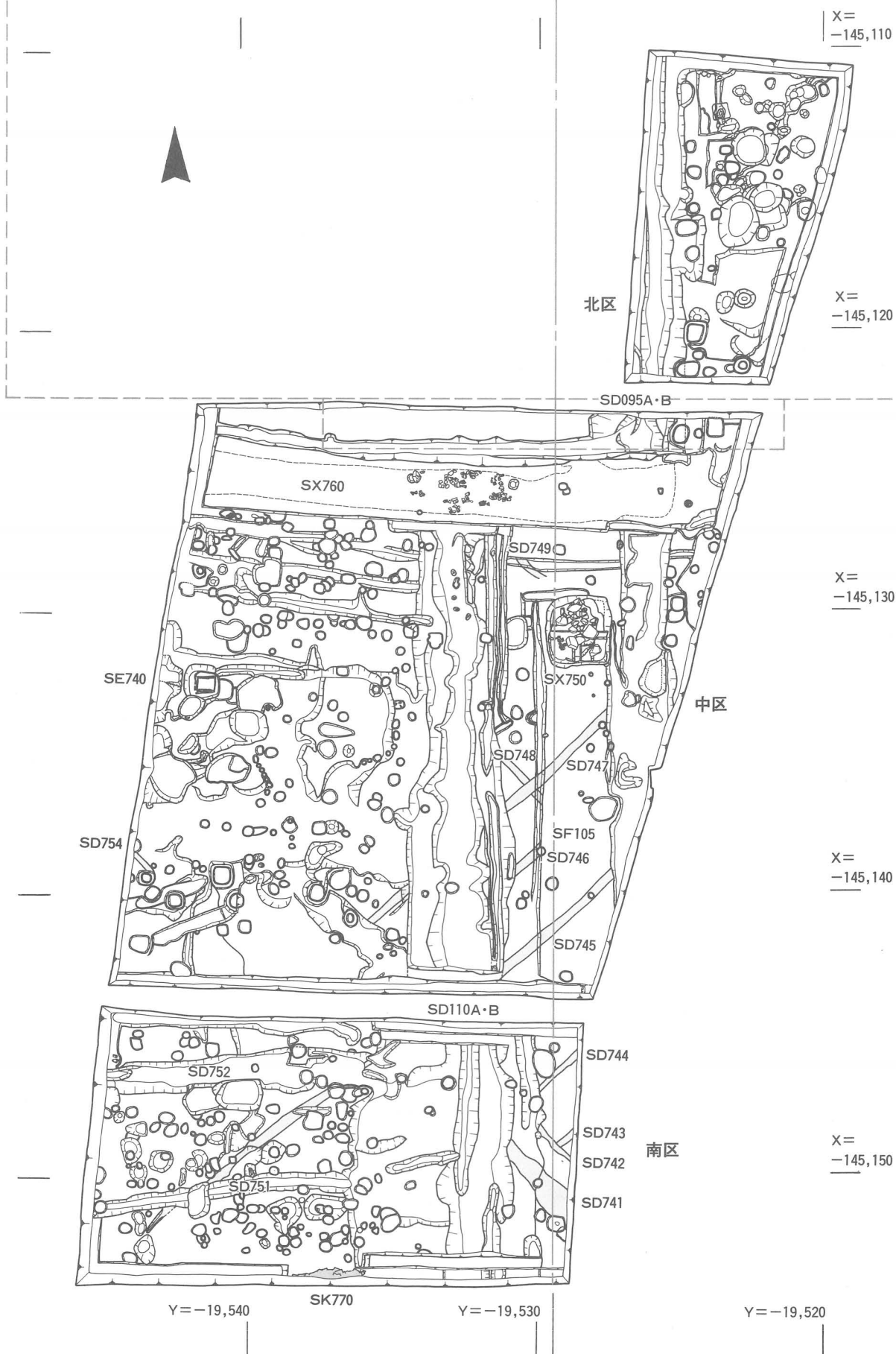


fig.8 金堂・中門北調査区(第306次)遺構平面図 1:200

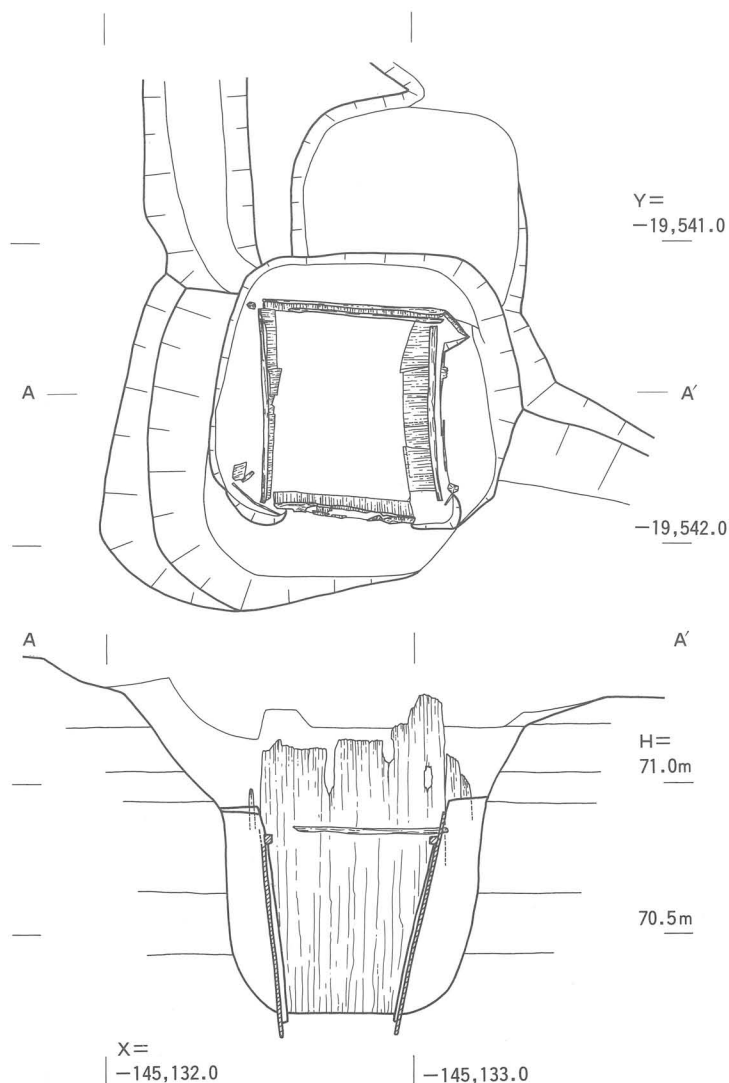


fig.9 SE740平面図(上)・断面図(下:Y=-19,541.55) 1:25

摺鉢状だが、下部ですぼまり約2m四方となる。東西約1.2m×南北1.4m、深さ約2mの縦板の井戸枠を用いている。底には拳大の礫が敷き詰めてあった。仕様としては、まず四隅に幅細の縦板を斜め45度に刺し、次に東西に縦約1.8m、横0.8~1.2m、厚さ3~4cmの一枚板をはめて安定させる。続いて、南北に縦約1.5m、横0.2~0.3m、厚さ3~4cmの板材を数枚ずつはめていき、最後に幅4~5cmの横材で押さえたと思われる。東西の枠板は一部に柄穴があり、厚さからすると床板などの転用材かもしれない。埋土は平城Ⅳ以前の土器を含む灰色~暗灰色の粘砂である。特記すべき遺物では、枠内南東隅の最上層(暗灰色粘砂)から小型海獣葡萄鏡が出土した。おそらく井戸を埋める際の儀式で用いられたものであろう。

西隆寺の遺構

SX750 金堂正面のSF105路面上で検出した灯籠の据付穴。東西約2.2m、南北約2.5mの隅丸方形で、深さは中央部分で約0.55mを測る(fig.10)。灯籠の基壇は抜かれていたが、基壇の下に敷く根石を検出した。路面を浅い摺鉢状に掘り下げ、裏込め土(遺物を多く含む暗茶灰色砂質粘土)を敷き拳大の石を据え、上にほぼ上端を揃えて直径0.35~0.5mの大型の根石を4石据える。根石は大体花崗岩だが、南東の1石は竜山石切石を斜め45度に割り、割面を上にして据えられていた。この割石は

深さ0.1~0.35m、埋土は黄灰色系の砂質土で、SD095Bより若干新しい平城Ⅲ~Ⅳの土器を多く含む。西に広く改作されていたが、特に南区では同時期の東西溝SD751・SD752が西から流れ込み、幅約6.5mと東西に広がる様子が観察できた。

SF105 右京一条二坊内の西二坊坊間西小路。西隆寺第3次調査検出の南延長部で南北約27m分を検出した。路面は灰橙色粗砂・黄灰色粘砂の地山上面で、路面幅は3.2~3.5m。道路心はX=-145,127.0でおよそY=-19,529.3となり、伽藍南北中軸線の振れN0°19'50"W(「北で西に0°19'50"振れる」：『報告書1993』)に沿う。下層のSD095AとSD110Aの心心距離はおよそ6.55m(1尺=0.295mとして22尺)となり、第3次調査とほぼ同じだった。

SE740 中区中央西端の地山(灰色粗砂)上面で検出した井戸(fig.9)。掘形は上部が約2.5m四方の

金堂基壇にともなう石材の可能性がある。また南半部の断割で、根石下の地山（暗茶灰色粘土）直上に小石の抜取痕跡が見つかり、断面観察で暗茶灰色砂質粘土の下に遺物を少量含む暗灰色粘土も観察できた。以上のことから、今回検出した根石は創建当初とは考えにくく、少なくとも1回は据付穴の位置を変えずに根石を取り替え、基壇を据え直した可能性が高いと推測する。遺物は、掘形埋土から平城Ⅳ、基壇抜取穴埋土から奈良～平安時代の土器が出土したが、これらから遺構の時期は特定できなかった。

また、SX750の心はおおよそ $X = -145,130.85$ 、 $Y = -19,528.57$ で、金堂心（ $X = -145,110.80$ 、 $Y = -19,529.05$ ：『報告書1993』）との距離は20.06m（1尺=0.296mとして67.8尺）となる。一方、金堂基壇縁との距離は8.4m（28.4尺）、推定南面階段の端との距離はおおよそ6.5m（22尺）となる。

SX760 金堂基壇正面の瓦敷（fig.11）。第3次調査の際、金堂基壇南東部で一部確認したが、今回は第3次の畦で残存した部分にあたり、周囲の遺構面より20cmほど高いレベル（標高約71.8m）で検出した。幅1.4～1.9m、西で北に振れながら東西に約16m延びる。仕様は、まずSF105やSD095、SD110の直上に、灰白～橙褐色シルトをベースとして小礫（東半で直径4～5cm、西半で直径2～3cm）を敷き、その上に10～15cm角四方で使用済みの割瓦を、凸面を上には敷き詰める。敷瓦には一部、西隆寺創建時の軒瓦6235C、6775Aなどが含まれていた。さらに、瓦敷の北辺は金堂南面階段の南辺推定部にあたることから、金堂基壇が存続する時期に敷いた舗装面と考えられる。

西隆寺廃絶後の遺構

SK770 中区・南区で多く検出した瓦磚類の廃棄土坑群の一つ。幅3m以上の大土坑で、調査区外南に続く。遺物包含層（灰褐砂質土）上面で検出した。

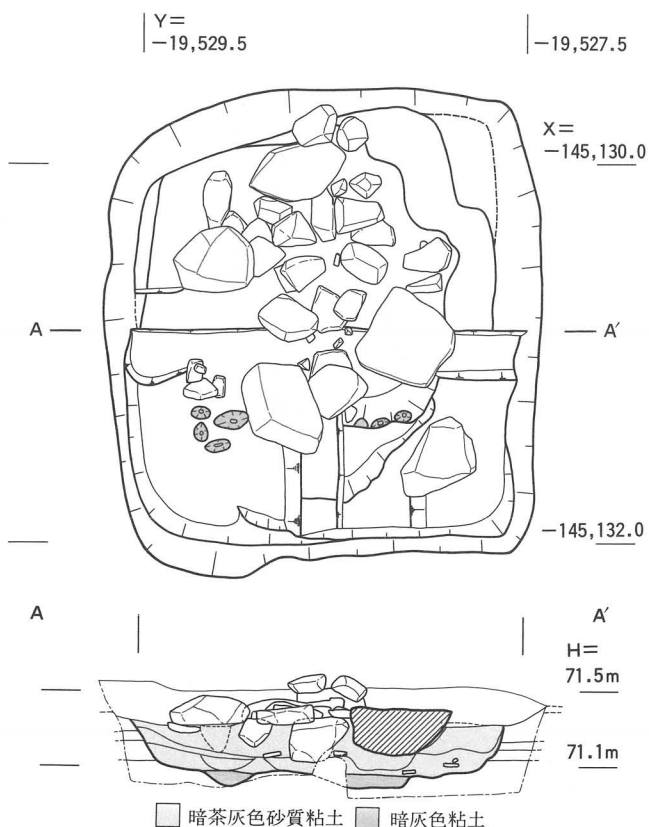


fig.10 SX750平面図(上) 1:40
断面図(下: $X = -145,130.9$) 1:40



fig.11 SX760(西から)

3. 中門・南門調査区（第309次）

調査は調査区を東西2区に分けておこなった。調査面積は両区合わせて406㎡である。

基本層序

調査区の基本的な土層は東区、西区とも、上から盛土、水田耕土、床土、茶褐色土、暗茶褐色土（遺物包含層）と続く。その下は遺跡のベースをなす茶褐色粘土層（東区）、黄色粘土層または灰色粗砂層（西区）であり、主要な遺構はこれらの土層上面で検出した。遺構検出面は現地表下約1.4mで、標高71.2m前後である。

検出遺構

検出遺構は西隆寺の以前と以降とに分かれる。東区北端は中門の、南端は南門のそれぞれ推定位置にあたるが、いずれも後世の削平により、基壇はもとより、基壇の掘込地業、雨落溝など、建物の位置、規模などを直接示す遺構は残っていなかった（fig.12）。

平城京以前の遺構

SD800・801 東区南端で検出した斜行溝。幅約0.3m、深さ0.1～0.2m。溝は国土方眼北に対して西に約50度振れる。埋土は堅くしまった暗褐色粘質土で、土器片が少量出土した。この両斜行溝は本来一連の溝で、後述のSD110により分断されたものであろう。

SD810・811 西区で検出した2本の斜行溝。SD810は幅0.4m、深さ0.2mで、国土方眼北に対して西に約40度振れる。SD811は幅0.2～0.4m、深さ0.2m、国土方眼北に対して東に約40度振れる。両溝とも溝内堆積土は暗褐色砂質土。SD810から須恵器小片が出土した。

SD812・813 西区の東西溝。SD812は幅0.4m、深さ5cm。埋土はこげ茶色砂質土である。SD813は幅0.35m、深さ0.16m、溝は国土方眼東に対して南に約10度振れる。埋土は暗褐色砂質土である。

以上の溝のなかには、水田耕作に関係する遺構が含まれている可能性がある。

平城京（西隆寺造営以前）の遺構

SD095 SF105の東側溝。東区の南東隅で、西肩のごく一部を検出した。

SF105 右京二坊坊間西小路。東区を南北に縦断する。路面西端はSD110の侵食を受けるため、広狭がある。調査区南端近くでの路面西端の座標値はX＝－145,194、Y＝－19,529.5である。路面東端は調査区南東隅で確認したのみで、座標値はX＝－145,195、Y＝－19,526.8である。遺存路面幅は2.7mほどである。路面には舗装の痕跡は無い。

SD110A・B SF105の西側溝。東区ではほぼ南北32m分を確認した。幅は最大で4.5m前後、深さは、0.5m前後。堆積層は大きく下層（灰色砂層）と上層（褐色ないし暗茶褐色砂質土）に分かれる。調査区南端から北へ約15mほどでは、溝底が検出面から約1.5mと1段深くなる部分がある（SD110A）。溝心は国土方眼北に対して西にやや振れる。東区北半の攪乱以北では、上層堆積土の東端を確認したが、西端は調査区外西へ広がっている。

SX803 東区北寄りの土坑。一辺約1.4mの不整円形、深さ約0.5mのすりばち状を呈する。埋土は暗灰色粘質土で、遺物は出土しなかった。

SE835 東区北寄りの井戸。掘形は一辺約3.2mの不整形、深さ約1.7mである。抜取穴出土の井戸枠残材から、縦板組の構造であることがわかる。井戸枠にはスギ、ヒノキを混用している。抜取穴からは他に土器、瓦、曲物などが出土した。土器は奈良時代のもので、須恵器甕、土師器の破片が多

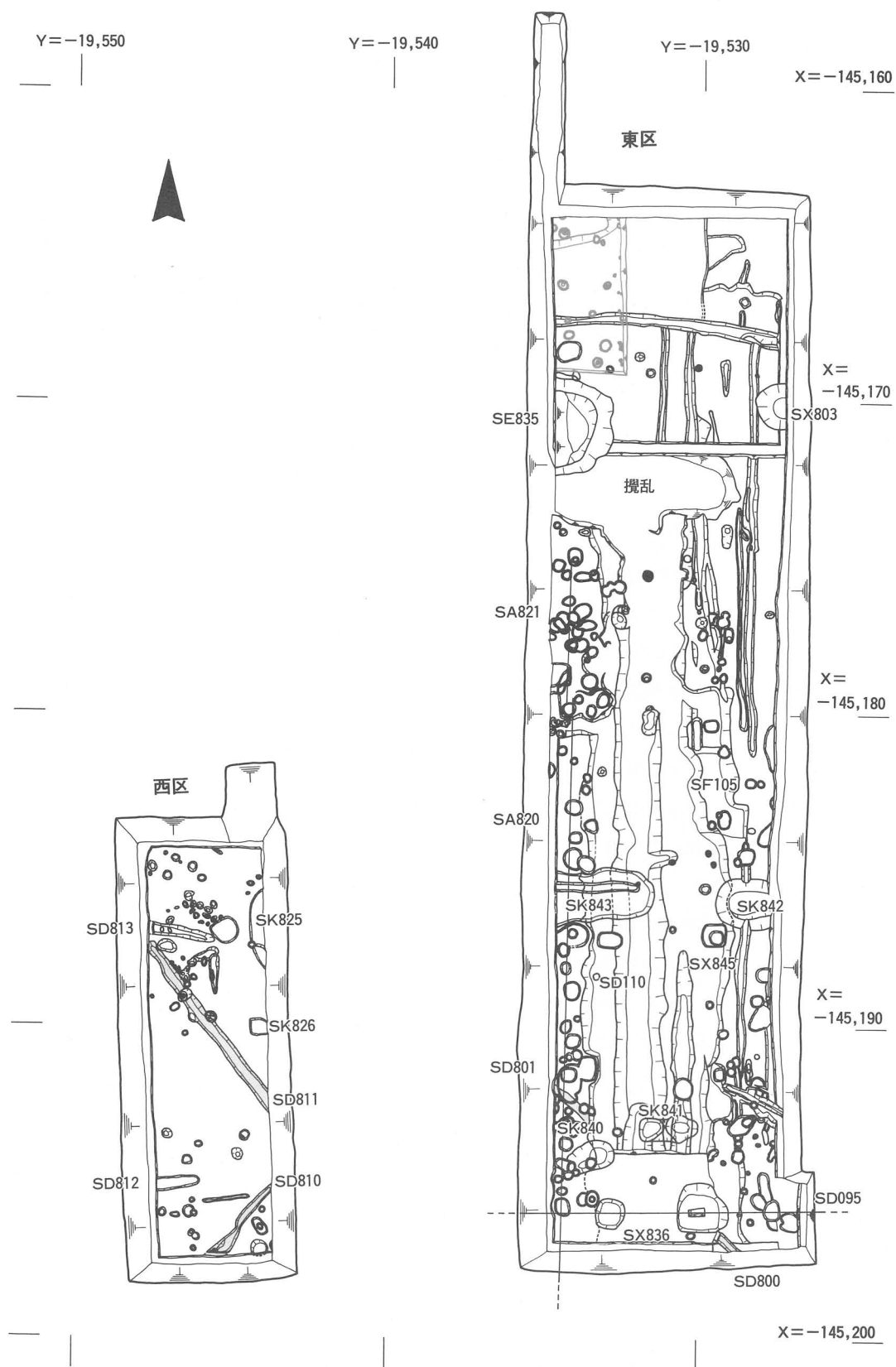


fig.12 中門・南門調査区(第309次)遺構平面図 1:200

量にある。須恵器鉢Dの完形品を含む。出土軒瓦には軒瓦編年Ⅲ－1期（天平17年～天平勝宝元年）の軒平瓦6721Eが出土している。この遺構の所属時期に関して一言しておく。この遺構の掘形はSD110上層の堆積土上面で検出したものである。しかし、本来の掘込み面が残っておらず、遺構の時期の上限は層位のみでは明らかでない。ただし、中門や南回廊に近接する位置関係から見て、西隆寺存続期とは考えにくく、西隆寺創建以前、または西隆寺廃絶後のいずれかであろう。出土遺物のうち、土器は詳細な時期の限定はできない。一方、瓦には西隆寺創建以前の軒瓦がある。もちろん、位置的にSD110の遺物が二次的に入り込む可能性があり、遺物のみでは時期の限定はできない。明確に西隆寺廃絶以後とみられる土器は含まれておらず、かつ軒瓦の様相からみると、西隆寺創建以前である可能性がより高いと推定し、この時期に含めて記述することにした。

SA820・821 南北塀。SD110の西方に多数の穴があり、まとまりを見出すのは困難をとまなうが、そのうちいくつかは塀の柱穴とみられる。SA820はSD110の西肩から約1.5mの位置にあり、東区の南端から北へ8間分を確認した。柱間は1.5～2.4mと一定しない。SA821は、その北の南北塀で、3間分を確認した。柱間は南から2.0、2.7mである。ともに十五坪の東端を画する塀とみなされよう。

SK825 西区北よりで検出した土坑。南北2.6m、東西0.4m、さらに調査区外東に広がる。深さは0.5mまで確認したが、崩壊の危険のため、掘削を断念した。埋土は暗褐色砂質土で、多量の炭化物と共に韃羽口や、須恵器壺などの土器が少量出土している。金属工房関連の遺物を廃棄した土坑とみられる。

SK826 西区SK825の約2m南にある小土坑。南北0.5m、東西0.6m、深さ0.1m、土器がごく少量出土した。

西隆寺廃絶後の遺構

SK840～843 瓦を廃棄した土坑群。東区南半部の4箇所集中する。多量の瓦片が投棄されていた。位置からみて、南門または南面築地所用の瓦を廃棄したものであろう。

所属時期未確定の遺構

SX836 東区南端の2箇所の大型の掘立柱穴。いずれも現状ではSD110上層堆積土上面で検出した。東側柱穴は一辺約1.6mの不整形を呈し、深さ0.7mあり、底に木製礎板がある。礎板は長さ約61cm、幅約29cm、厚さ約4cmのヒノキ材で、下面は調整し、上面は割ったままである。西側柱穴は掘形は一辺が約0.9m、深さ0.6mの不整形を呈する。両柱穴の間隔（心心）は約2.7m（9尺）である。2柱からなる門状の施設が想定できよう。SX836の東方約2.5mに、柱筋の揃う柱穴が1箇所あり、門に取付く塀の可能性がある。なおこの柱穴の柱痕跡から銀製細板が出土した。SX836東柱穴の柱抜取穴には凝灰岩切片や、玉石が投棄されている。抜取りの時期は、ほぼ西隆寺南門廃絶後とみなしてよいと思われるが、上限については、SD110上層堆積が進んだ以後としか限定できない。したがって、西隆寺存続期にさかのぼる可能性がある。仮に西隆寺期とすれば、南門との共存関係が問題になる。今回の調査では、南門の位置を決定できる資料は得られなかったが、SX836が門の位置に近接する位置にある可能性が高いことは言えよう。

SX845 東区の柱穴。SK842の南西にある柱根（直径約0.3m、残存高0.43m、ヒノキ材）を残す柱穴（一辺0.4m、深さ0.5m）である。これと関連する柱穴は調査区内にはみあたらず、建物、塀などのまとまりがつかめない。遺構の上からはSD110との前後関係などは不明で、時期の限定が困難である。